

おじやんの青春日記

その2



Oct.
25.
1997

1997

里中賢司

新年あけまして おめでとーいげんまつ。

昨年お正月、何年ぶりかの年賀状として、豪華特集年賀状『おじさんの青春日記』をお送りいたしましたところ、多くの方々からのご激励、「来年もぜひ!」という嬉しいお便りを頂戴いたしました。

「ブタもおだてりや木に登る」。私の仕事と同様、苦心して作ったものを喜んでいただいたときは、とても生きがいを感じるものです。

昨春からの休日の増加に加え、不況ということもあって、キーボードの運びが予想外に進みました。

仕事や日常のなかで触れたことをメモし、綴っていく作業は、まったく新しい発見にもつながり、「おじさんボケ」の予防にはとても効果があるように思います。

このご挨拶状を執筆するさ中の旧臘十二月六日、昨年お送りした「おじさんの青春日記」所収『ものを造るといふこと』が、(財)広島市文化振興事業団主催の文芸コンテストに入賞したとの報せが届きました。

新年一月十九日に行なわれる授賞式の際にいただける賞金は、「アンツイオ上陸記念博物館」(本編詳述)にカンパすることを考えています。(実は博物館へのカンパをイメージして、賞金を狙っていました!)

「おじさんの青春日記 その2」は日本国内のほか、ホノルル、サンフランシスコ、ロサンゼルス、ニューヨーク、エジンバラ、ミラノ、フィレンツェ、ローマの各都市に在住する方々に宛て、神秘的地球の自転とともに次々おとずれる、元旦にお届けいたします。

敬愛する世界中のごく少数の感性あふれる読者に、新年のごあいさつとともに「おじさんの青春日記 その2」を謹呈できることを感謝しております。

ことし一年、あなたのご健康をお祈り申し上げます。
ファンレターください。

里吉賢司

一九九八年(平成十年) 元旦

おじさんの青春日記

その2

おじさんが元気がない。おじさんが元気がないから日本が元気がない。
グダグダぬかす嫁は返品しよう。ナマイキな子娘は張りたおせ。
起て、萬國のおじさんたち。愚痴と評論はもうやめて、明日から小さなクーデターを始めよう。
青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、全国の孤独なおじさんに贈る、
-おじさんの青春日記 その2-

書き手

里吉 賢司

この作品は和歌山新報への寄稿文ほかを加筆してまとめたものです。

おじさんの青春日記（その2）

合衆国陸軍軍曹

マスダカズオ（一）

ヘイタリアヘ

一九九一年春。米国ロサンゼルスのホテルに滞在中の私は、知人の紹介でロス郊外に住むひとりの日系人の訪問をうけた。増田正雄氏（当時七四歳）。

増田正雄氏の父マスダ・ゲンスケ氏は和歌山県出身の日系移民。二歳の時、一八九八年（明治三十一年）新天地を求め米国・サンフランシスコに渡った。

増田一家は日米開戦後の一九四二年、その家族とともにアメリカ政府によってアーカンソー州ジェロームの日系人強制収容所に収容される。

その年、米国に在住する日系人二世で組織される合衆国陸軍第四四二部隊が創設され、同部隊に徴兵された正雄氏の弟、和男（カズオ）はイタリア戦線でドイツ軍との交戦ののち戦死。

日米戦争を境として数奇な運命をたどらざるを得なかった、在米の多くの日系人たち。戦後数十年にわたる運動のすえ、米政府による戦時中の日系人の扱いに対する謝罪と、補償をかちとるまでの日系人の苦難の歴史。増田氏はホテルのロビーで夜が更けるまで、当時の苦澁を私に切々と語り続けた。

*

一九四一年（昭和十六年）十二月八日の太平洋戦争開戦とともに、当時アメリカ全土に住んでいた日系人、日系二世はアメリカ当局によって米国本土各地に点在する「日系人強制収容所」に収容される。マンザナー収容所（カリフォルニア州）、ツールレーキ収容所（カリフォルニア州）、ポストン収容所（アリゾナ州）、ヒラ・リバー収容所（アリゾナ州）、ミネドカ収容所（アイダホ州）、ハート・マウンテン収容所（ワイオミング州）、グラナダ収容所（コロラド州）、トールパス収容所（ユタ州）、ローア収容所（アーカンソー州）、ジェローム収容所（アーカンソー州）。

これら十ヶ所の収容所に強制収容された日系人はおよそ十二万人。強制収容所へは一人二個分のスーツケースしか私物の搬入を許されず、劣悪な環境の収容所でもっぱら自給自足の生活を送っていた。収容者は憲兵の厳重な監視下におかれ、飼い犬を追って鉄条網に走り寄った日系人が看守の機関銃で射殺されたり、長期間の監禁に耐え切れず自殺する者が出るなど、日米の戦いが終わるまで続いた収容所は多くの悲劇の舞台となったのである。

増田ファミリーの五男カズオ（和男）は陸軍に徴集され、日系人だけで編成されるアメリカ陸軍四四二部隊に入隊した。一九一八年カリフォルニアに生まれたカズオは幼い頃から負けず嫌いで、体型は小柄ながらあらゆるスポーツをこなすスポーツマンだった。眉は濃く、目鼻だけは整って、きりつと結んだ厚い唇に強固な意志の強さが彼の遺影からうかがえる。

家族とともににんじんや、豆を育てる農業に励んでいた青年は歴史の変転に翻弄され、鋏（くわ）を捨てて父の母国である日本やその同盟国であるドイツ、イタリアに銃を向ける兵士となったのである。

ミシシッピ州キャンプ・シエルビーでの激しい戦闘訓練を経て、カズオの属する四四二部隊はヨーロッパ戦線に派遣されることとなる。

一九四四年六月、ローマの南約八十キロ、地中海に面した港町・アンツィオに上陸したカズオは、チビタベキオ、グローセツト、リボルノなどの激戦地を経てイタリア半島西部を地中海ぞいに北上、ドイツ軍を徐々に北へ追っていった。

休暇でローマを訪れたカズオは、米国兵に群がって食べ物や菓子などを物乞いするイタリアの子供達の姿や、町なかの悲惨な様子を詳細な手紙につづって、はるか米国の強制収容所にある家族のもとに書き送っている。

日系人であるがゆえに四四二部隊は常に危険な最前線に配置され、兵士の戦死傷率は米人兵士にくらべ圧倒的に高かった。

イタリア本土で戦端が開かれた初期、一九四三年九月から翌年一月にかけての五ヶ月で、日系人下士官兵の戦死、行方不明者百三十五名に対して、白人将校の戦死、行方不明者はわずか七名にすぎない。

中国大陸や西太平洋全域で戦う日本軍将兵が、「日本人」という共通の属性をよりどころに団結し、米英軍などと戦ったのに対して、四四二部隊の日系人兵士は本来味方である米兵からの人種差別や、敵国人日本人を父祖にもつことへの敵対心と戦いながら敵兵に立ち向かうという、三重苦を背負っていたのである。

日系人兵士たちの士気は極めて高かった。英国やフランスなど米国の同盟国をナチスドイツの脅威から救うという白人兵士達の政治的な大義名分に対して、カズオたち日系人兵士は強制収容所で人質となつている家族を一日も早く解放したい、という極めて素朴で、かつ切実な動機をもつて命がけで戦った。

戦線で負傷し入院を余儀なくされても、退院許可が出ないうちに包帯を巻いたまま病院を抜け出し、勝手に戦線に復帰する者もあつた。このような「脱走者」は「逆無許可離隊者」と呼ばれ、米国人兵士の目には「信じられない」行為と映った。

アメリカ合衆国陸軍史上、第四四二部隊は同じ規模の連隊中でもっとも多くの勲章を受けるといふ記録を樹立した。

ヨーロッパでの戦いの後半には、共に戦う多くの米国人の日系人兵士を見る目は、侮蔑から畏敬へと変わつていった。彼らの戦いぶりに「サムライ」「ブシドウ」の伝統が脈々と流れていることに驚嘆したのである。

四四二部隊でカズオと行動を共にしたジャック・ワカマツは戦後五十五年にして執筆した回想録“THE SILENT WARRIOR（静かなる戦士）”のなかでこのように語っている。

「私はカズオに休みの時でも決して気を抜くなど言つた。ここは戦争の最前線で、敵は人間に対する慈愛の念を持つてはいないのだと。カズオはじつと私を見て何も言わなかつた。我々は敵を憎んだが、会つたこともない敵の人間そのものを憎むことは出来なかつた。アメリカ人はヨーロッパの民族の確執というものから遠く隔たつていたので。誰かを殺すこととはつらいことだつた。知らない人間を憎むなんて出来なかつた。ヒトラーが人々に行なつた行為は憎んだし、それを止めるべく戦いもしたが、どのみち憎むということはアメリカ人には適さない習慣なのだ」

アンツイオ上陸から二ヶ月後。当初二百十二名いたカズオ達の中隊は百八名が戦列を離れていた。十七名が戦死、八十三名が負傷、八名が行方不明だつた。

一九四四年八月二十七日。フィレンツェ市内を流れるアルノ川南岸に陣をとつた四四二部隊F中隊は、川をはさんでドイツ軍と対峙していた。敵兵士の話し声が聞こえるほどの近さだつた。

二十七日深夜、アルノ川を渡つての偵察を志願したカズオは、陣地で待機する戦友の軍用蛍光時計を借り受ける。カズオの時計は修理のために軍需物資部に預けられていた。

「川を渡る時、濡らさないようにな」

「わかつた。かならず返すから心配するな」

彼はこう言つて、ヒロ・タクサガワ、ジロー・マツモトの二人の日系人兵士とともに暗闇のアルノ川を渡り始めた。

二十八日午前零時頃。陣地の無線電話が鳴る。カズオからだつた。
「無事渡つたぞ」

「ドイツ兵は近くにいるんだろ。なぜ、電話なんかしたんだ！」

「無事川を渡ったから、時計の心配はしなくていいと伝えたくてね」

「わかった。気をつけるよ」

カズオが陣地で待機する仲間と交わした最後の交信だった。

三人の偵察隊が川を渡り、アルノ川北岸の地雷原を進み始めたとき、異常に気づいたドイツ兵に発見された。暗闇のなかではあったが、明らかにカズオ達にとって不利な状況だった。

「投降しろ！」

ドイツ兵の叫び声と同時に、敵のもつとも至近距離にいたカズオの機関銃がいきなり火を噴いた。

五、六人のドイツ兵の銃撃はカズオに集中する。

「退却しろ！ 川を渡るんだ！」

カズオの後に続く二人を退却させ、敵の攻撃を一身にうけて応戦する。

この銃撃戦は始まったと同じような唐突さで終わった。十八発の応戦のうち、カズオの銃は急に音を止めた。彼が倒したドイツ兵と同じように、カズオの血がアルノ川に流れていった。

カズオとともに川を渡った二人はかろうじて陣地に逃げ帰ったが、敵地にカズオを残したまま援護砲撃することはできなかった。

『一歩もしりぞくな。うしろには勝利はないんだ』

カズオが生前しばしば口にしていた言葉どおり、彼は真正面を向いて敵と戦い、二人の戦友の命を救った。

「なぜ危険な深夜の偵察になんか行ってしまったんだ！」

戦友の一人はこう言っただけの死を嘆いた。

マスダカズオはただ戦いに勝って、そして家族の待つ家に帰らなかったただけなのだ。

アンツィオ上陸からわずか二ヶ月後の一九四四年（昭和十九年）八月二十八日未明、マスダカズオはイタリア中部の中世都市、フィレンツェ・アルノ川河畔で戦死。

一九一八年（大正七年）十一月三日生まれ。アメリカ合衆国カリフォルニア州ファウンテンバレー出身。四四二部隊でのコードネームは「アラブ」。享年二十五歳であった。

カズオが最期まで腕に巻いていた蛍光時計は、今も遺族によって保存され、正確に時を刻んでいる。

カズオが戦死した頃、イタリアから東へ一万二千キロ離れた西太平洋では、サイパン島の日本軍守備隊玉砕に続き、周辺の島々で日本軍が絶望的な戦いを繰り広げていた。日本国内では米軍による大規模な本土空襲を想定して、都会に住む学童の組織的な疎開が始まっていた。

カズオ戦死の報せは、收容所のマスダ一家にもたらされた。陸軍からの電報を長女メアリから読み聞かされたカズオの母タマエは、

「なぜ神様はカズオの代わりに私を召されなかったの。私の寿命は尽きているのに」と泣き崩れた。

一九四五年、終戦とともにマスダ一家は收容所から解放され、故郷カリフォルニア州オレソング郡に戻ってきた。しかし、同じ街に住むアメリカ人の日系人に対する迫害は激しく、地元で十分な食料品や日用品の購入さえままならない生活を余儀なくされていた。「おまえたちは收容所へ帰れ」という脅迫電話はひっきりなしにかかってきたし、「愛国者グループ」と名乗る米国人たちはマスダ家をわざわざ訪問し、

「タクシー代は出してやるから、この町から出て行け。もつとも、どこへ行ってもお前達の安全の保証はないがね」と、一家にむかつていやがらせを言い放った。

身体の損害を受けていないという理由で、地元の警察も日系人家族に対して極めて冷淡な態度をとった。

正当な手続きを経てアメリカに移民し、合衆国憲法のもとで教育を受け、そのアメリカのために戦って命を捧げた、カズオの遺族に対する地域住民の仕打ちにマスダ一家はやり場のない無念を噛みしめた。

長女メアリーは、カズオたち日系人が命を賭して獲得しようとした思いを引き継いで、闘い続けることを決意した。

メアリーはじめマスダ一家は、この窮状をワシントン政府に直訴した。

事態を重視した中央政府は、将軍 Joseph W. Stillwell（ジョセフ・W・スチルウエル 元沖繩上陸作戦軍最高司令官）をカリフォルニア州に派遣し、オレンジ郡のマスダ家の前に民衆を集め、故マスダカズオの勇気を称える十字殊勲章の授与式をおこなった。

日系人の一兵卒の戦死に対する合衆国政府のこの措置は、当時としては極めて異例のことであった。

勲章授与式でスチルウエル将軍は次のように演説した。

「お金や皮膚の色はアメリカ精神の基準ではない。すべてに公平で言論の自由があり、法において平等であり、偏見をもたず、大多数にしたがう。真のアメリカ人とは、他人が生き続けるために自分の命を投げ出すことは当然だと考える人のことである。故マスダカズオはその意味において真のアメリカ人であった。」

また、将軍に副官として随行したハリウツドの映画俳優 R. Reagan（R・リーガン）退役大尉は聴衆を前に、故マスダカズオの死を悼んで次のようにスピーチした。

「アルノ川の砂浜に染み込んだ血は、ドイツ人であれ、日本人であれ、アメリカ人であれ、すべて同じ赤い色である。アメリカは世界で唯一、人間のみで形成された国ではなく、理想で成り立っている国である。」

ヨーロッパ戦線で家族を失った多くの日系人の二世や三世たちは、アメリカ政府による日系人の強制収容所への収容を不当なものと、アメリカ政府に粘り強く訴え続けた。また、全米各地で米国政府を被告とする訴訟も提起された。

ヨーロッパから移民したドイツ系、イタリア系の移民者に対しては、対戦中の敵国人でありながら、合衆国政府はきわめて寛容な態度をとっていた。

四四二部隊から生還した日系兵士たちは、戦争中のことに関してはおしなべて寡黙であった。英雄的な戦いを報道で知った米国民の多くが彼らを歓声で迎えたが、彼らのほとんどは長い間沈黙していた。戦争の傷を癒して、懐古の思いにふけるには数十年という歳月が必要だった。

古代から兵士たちは戦場に出る前までは平凡な息子であり、父であり、夫であった。

歴史を通してみて、戦争の体験が悲惨であればあるほど、戦場から生還したのちも彼らは口を重くして語ろうとしない。戦争指導の頂点周辺にいた者が、懐古の思いをもって当時を振り返る。しかしそこに語られているものは皮相の回顧にすぎず、戦場で起こったあらゆる醜い出来事の前にはほとんど意味をもたない。

もの言わず戦死していった無数の兵士の屍（しかばね）を踏み付けて、歴史がただ滔々（とうとう）と流れていく。



KAZUO MASUDA

四四二部隊帰還兵とは対照的に、合衆国憲法のもとで米国教育を受け、アメリカに同化した三世たちは積極的に組織的な運動を展開した。カズオの姉メアリーは運動の先頭に立った。ダニエル・イノウエ、スパーク・マツナガ各合衆国上院議員ら四四二部隊生き残りの日系議員もこの運動に奔走した。

一九八一年、「戦時中の一般市民の移住および収容に関する委員会」が米国議会に設置される。

一九八八年八月、合衆国政府は戦争中の日系人の隔離・強制収容は不当であったことを公式に認め、謝罪するとともに、生存している収容者全員に二万ドルの補償金を支払うことを決定した。

日米開戦の翌年一九四二年二月、F・ルーズベルト大統領によって公布された行政命令九六六号は、四十六年の歳月を経て米国政府の謝罪とともに無効とされた。

ホワイトハウス大統領執務室で「戦時における日系人強制収容に関する補償法案」に署名したのは、かつて將軍スチルウエルの副官としてマスダ家を訪れ、勲章授与式でのスピーチで聴衆に大きな感銘を与えた、元陸軍退役大尉、R Reagan（ロナルド・レーガン）大統領その人であった。

この署名は間もなくホワイトハウスを去るレーガン大統領にとって、大統領任期中最後の法案への署名であった。

署名式のためにホワイトハウスに招かれたカズオの遺族はじめ関係者を前に、大統領はマスダ家を訪問した時の思い出を、感慨をこめて語りかけた。日系人関係者の情熱と勇気を称える大統領の言葉に、マスダ一家は数奇な歴史が渦を巻いて流転する場面に、今まさに自分たちが直面していることを胸に刻んだ。

かつてマスダ家を訪れた一青年将校が大統領にまで登りつめ、そして彼とともにここホワイトハウスで一つの時代にピリオドを打とうとしていることを、そこにいる全員が鳥肌たつ思いで見守っていたのである。

補償金として収容者に支給された二万ドルの合衆国政府保証小切手のかなりの枚数は、今だに換金されることなく、米国における日系人の誇りの証（あかし）として、日系人家庭の懐（ふところ）深く保存されているという。

一国の過去の行政の誤りをただすために、四六年間、関係者の膨大な労力が費やされた。本来恩恵を受けるべき約十二万の収容者の大部分は、名誉の回復を知ることなくすでに故人となっている。

マスダカズオの遺志を引き継いだ姉メアリーは、日系人補償法が制定される直前の一九八七年、七九歳で死去。生涯独身を通し、弟カズオの墓を守りながら日系人の名誉回復にその人生を捧げた。

おじさんの青春日記（その2）

合衆国陸軍軍曹

マスダカズオ（二）

〈アンツィオ上陸記念博物館〉

イタリア国アンツィオ市
『アンツィオ上陸記念博物館』館長
パトリツィオ コランツィオーノ様あて書簡

一九九七年四月三十日付け、貴方からのご丁寧なお便りを頂戴いたしました。ありがとうございます。ございました。

先日は私と友人たちが、何の前触れもなく貴博物館をおたずねしたにもかかわらず、貴方やスタッフの皆様に変えご親切にしてくださいましたこと、深く感謝しております。

日本からローマに到着した私は何をにおいてもまず最初に、アンツィオの町を訪れたいと思つたのです。

何のあてもなくアンツィオの港を徘徊したのち、ローマに引き上げようとしていた私たちに、町の人が願ってもない情報を教えてくれました。一九四四年の連合軍によるアンツィオ上陸作戦の資料を展示した博物館が、町のはずれにあるということです。夕闇が迫り、雨のなかを私たちは大急ぎで車を走らせました。

五十三年前の一九四四年五月、アメリカ・ミシシッピの港を輸送船で発ったマスダカズオたち日系人四四二部隊は、ひどい船酔いに悩まされながら大西洋を横断し、ジブラルタル海峡を抜けて地中海に入りました。ドイツ海軍潜水艦の魚雷におびえながら、劣悪な二十一日間の航海のちアフリカ大陸北端・オランに入港。

近海の制海権は連合軍がすでに掌握していたとはいえ、ドイツの戦闘機が時折上空に飛来するような状況でした。カズオたちは、アンツィオの港にイタリア本土での第一歩をしるしたのです。

私たちがアンツィオの埠頭に立つたのは、地中海から吹き込む雨まじりの冷たい風の吹く日曜日でした。打ち寄せる地中海の波音が間近に聞けるアンツィオの町は、今はのどかなりゾート地。港を見下ろす斜面にはコロニアル風の別荘や、意匠を凝らしたマンションが南国の樹木の間立ち並んでいます。

半世紀前、今は風景画のように美しいこの港をめぐつて、連合国と枢軸国とが地中海を血で染める大激戦を展開したことは、貴方の上陸記念博物館に展示してある当時の資料や遺物を見るまでは、容易に信じることができませんでした。その攻防戦はマスダカズオがアンツィオの港に上陸する、わずか五ヶ月前の出来事です。

(*) アンツィオ上陸作戦

ドイツ、イタリア枢軸軍への猛烈な反撃を繰り返した米国、英国などの連合軍は、一九四三年七月シチリア島を制圧。翌年一九四四年一月二十二日イタリア・ローム南八十キロの軍港アンツィオに奇襲上陸作戦を敢行。連合軍は一週間で兵力六万九千人、火炮五八門、戦車二三七両はじめ、大量の補給物資を揚陸。迎撃するドイツ軍の反撃はすさまじく、連合軍はわずか三日間の上陸作戦で五千五百名の死傷者をだすという被害を受け、アンツィオの住民も多くが犠牲となった。この年六月に行なわれたフランス・ノルマンジー上陸作戦と並び、戦史に残る大上陸攻防戦であった。この後六月四日、連合軍はローマに入城。ドイツ軍は撤退につぐ撤退を余儀なくされる。

パトリツィオ館長はじめ有志の皆様が、それぞれご自分の仕事をやりくりしながら、あの壮大な博物館を無給で運営されていることを知り、驚くとともに私は深い感銘に浸りました。

博物館を守り続けるスタッフの皆さんは、パトリツィオ館長をリーダーに十四人。年金生活者、銀行員、商店主。六十代、七十代とおぼしき方々が、当たり前のごとく博物館を愛し、それぞれの役割を真摯に果たそうとされている姿を拝見して、私は儀式を執り行う司祭を見ているような感慨を覚えました。

社会人としての責務の過半を終えた人々が、ゆったりと、この博物館を生きがいに、残りの半生を送ろうとされていることが、私にはひしひしと伝わってきました。老いに向かう人間の、ひとつのありようを教えてもらったような気持ちでした。

アンツィオの町の中心近く、緑に囲まれた典雅な博物館は、前庭に砲弾や軍用機のプロペラが展示されていなければ、美術館と見まごうほどです。

私と藤川君はローマに着いて以来、街中にあふれる遺蹟や街なかの細部にまで行き届いた意匠の素晴らしさに興奮して、深夜まで語り合っていました。

藤川君は私と同じ広島市内の生まれ。二人が大学生の時、初めて知ったことなのですが、彼と私は偶然同じ小学校の出身でした。私たちの小学校は、原子爆弾の爆心地にもっとも近い小学校でした。原爆が投下された一九四五年八月六日朝、小学校にいた私たちの先輩二百十八名は、頭上を襲った原子爆弾の火球に包まれました。

藤川君は美術大学を卒業し、現在は東京でも有数のグラフィックデザイナーとして活躍しています。私は法学部の学生の頃、彼の大学によく遊びに行っていたものです。

ある日、彼らの教室の扉を開けたとき、私の目に飛び込んできたのは、白昼、教室の中央に立つ全裸の女性でした。学生たちは熱心にデッサンを続けていますが、私は呆然とその場に立ちすくんでしまいました。

論理に呪縛（じゅばく）された世界にいた私は、彼らの棲む「創造と美」の広野は自由極まりなく、別世界のように果てしなく思えました。当時、東京の大学を嵐のように襲っていた、学生と体制権力との争いもここには無く、学生たちは平和な学園で悠然と制作に携わっていました。

藤川君とイタリアを旅する間じゅう、行く先々で彼は古代から現代にいたるイタリア美術とデザインについて語り続けました。アートに疎い私にとって、これ以上ない最良の旅のパートナーでした。限られた日程のなかで、彼は念願の美術館めぐりを犠牲にしてまで、アンツィオに同行してくれたのです。

私たちが上陸記念博物館を訪れた日は、偶然にもイタリア終戦記念日を控えた特別な催しが行なわれていた日。博物館のなかは市民でごった返していました。

若いカップルが手をつないだまま、展示してある上陸米国兵の手帳や、ドイツ兵の遺品を、黙って、熱心に見入っている姿がとても印象的でした。

一九五一年、アンツィオに生まれたパトリツィオ館長はことし四十六歳。

首都ローマで自治体の予算立案を担当する公務員職のかたわら、自宅のあるアンツィオ市の「アンツィオ上陸記念博物館」館長にボランティアとして就任されました。若くして戦争に命を捧げた数多くの兵士に今も尊敬の念を抱き、現代の若者に歴史の重みを伝え続けるために、みずから発起人として「アンツィオ上陸記念博物館」を設立されました。わずかな公的援助では賄（まかな）えず、スタッフの皆さんが月々一万里ラ（約七百元）ほどを積み立てし、施設の整備にあてておられるとか。

館長は私にこう語りかけました。

「私の両親達は戦争前からアンツィオ市内に住んでいました。しかし、連合軍上陸作戦に先立つ一九四三年十月十九日、米英軍による激しい無差別爆撃で当時の家は跡形も無くなるほど破壊されてしまいました。当時、五、六千人いたアンツィオの住民すべては奥地の森に避難し、バラック生活を強いられました。この生活はローマが解放されるまで続きまし。私の母は戦後生まれの幼い私に、この時の悲惨な状況をことあるごとに語り続けました」

館長のお母様が戦争中に受けた心の傷は、一生お母様の感受性を支配して、体験した事実を息子に語り伝えることで、その傷を少しでも癒そうとされたことが私には容易に理解できません。

第二次世界大戦の後、広島に生まれた私が、戦争前後のさまざまな出来事に関心を持ち、現在も仕事の合間に当時の記録を集め続けているのも、思い起してみれば一九四九年（明治四十二年）生まれの私の母から、戦争や広島原爆にまつわる悲劇を、幼い頃からくり返し聞かされて育ったことが動機になっていられるのかもしれない。

母は自分の兄弟や親族の多くを奪ったこのたびの戦争について、国民のなかで十分な総括がなされていないこと。そのことが戦後の日本人の精神形成に大きな影響を与えているという意味のことを、違った言葉でつぶやいていました。

幼ない頃、いやがる私に母が乾布摩擦と引き換えに軍歌を歌ったり、戦争中の体験を話していたことを、母は晩年まで懐かしそうに話していました。目をそむけず、歴史をさまざまな角度から直視すること。人間の罪深い過ちを後世に語り継ぐこと。

パンを得るために生きる日々でなく、このことは、とりわけ悲劇の舞台に生まれ育った者にとっての責務とも、今になって考えるようになりました。

戦場という極限地で、人間が動物にも劣る卑しさをみせ、神仏にも値する崇高な行動を示すことができることを、私は多くの記録のなかに読みとつてきました。

「人間とはなにか」。この問いは、私にとって今も昔も変わらぬ、生涯の難問であり続けます。

あなたに見送られてアンツィオ上陸記念博物館を辞したのち私たちは、一九四四年八月二十八日フィレンツェ・アルノ川河畔でドイツ軍との戦闘のち戦死した、元合衆国陸軍軍曹マスダカズオがたどった経路をそのまま旅し、フィレンツェに到りました。ローマ、チビタベキオ、グローセツト、リボルノ。

緑深いトスカーナの森で、遠くドイツに家族や友人を残したままのドイツ兵と、アメリカ僻地の収容所に家族を囚われたままの兵士は戦場で遭遇し、互いに銃をとって殺し合ったのです。

カズオは明治生まれの日本人である、父ゲンスケの影響を色濃く残していました。

一八八一年前後（明治中期）から一九三一年前後（昭和初期）にかけて、日本は集中的にハワイ、北米、南米、東南アジアへ数十万人規模の移民者を送り出しました。一時期にこれほどの規模で日本人が海外での永住の意志をもって海を渡ったのは、日本の歴史上、希有のことです。

マスダゲンスケの祖父母は、日本がまだ鎖国を解く前の時代に生きており、侍は腰に大小の刀を携えて「潔（いさぎよ）し」を無二の哲学として日々を送っていました。武道に長けていたマスダゲンスケは、礼節を尊び、武士道の魂を残していました。「家名を傷つけること」「恥」を何よりも嫌悪していました。

ゲンスケはそれゆえに日本軍によるハワイ真珠湾攻撃のその日、ただちに敵性人としてFBIに拘留され、長期間厳しい尋問を受けました。

イタリアの戦場で米国人兵士たちが極限の状態のなかで、神への罪におびえ、祈りながら暗黒の日々を送っていたのに対して、日系人兵士たちは「恥」をさらすことを何よりの恥辱として考え、「オトコラシク」絶望的な状況で戦火に身を投げ出していきました。しばしば両者の倫理や規範は激しく衝突しました。

私たちが出会う多くの日系人二世や三世たちの振る舞いのなかに、日本の明治の頃や、武家政治の時代に生きた日本人への郷愁のようなものを感じるのには、私だけではありません。千年も二千年も昔のことではなく、わずか百数十年ほど前まで、私達の国のリーダーは些細な失敗や恥辱を理由に、自らの肉体を刃で刺し、絶命させるといった文化をもっていたのです。

フィレンツェ市街を貫くアルノ川は全長およそ百五十キロ。トスカーナ州東部の高地を源にまず北に流れ、フィレンツェ市街を西にむかつてピサへ、そして地中海へ注いでいます。中世、流通の基幹としてメディチ家を中心としたフィレンツェに莫大な富をもたらした、繁栄の川でもあります。

フィレンツェ市街の中心地、ベッキオ橋がかかるあたりの流れはゆったりとしていて、砂州で水鳥がのどかに遊んでいます。両岸に立ち並ぶ中世そのままのドームや教会、美術館のたたずまいに、きつとカズオも戦場にいることを束の間忘れたに違いありません。

私たちはアルノ川の川岸を終日さまよい、カズオ戦死の場所を探しました。しかし、私たちはついにその場所を特定することはできませんでした。

その日の夕暮れ、私たちはフィレンツェ郊外の森のなかにひっそりとたたずむ、米軍戦没兵士共同墓地へお参りしました。緑深い森のなかに広大な墓地が広がっています。チリひとつ落ちていない見渡すばかりの緑の芝生に、幾百、幾千もの真っ白い十字架が何列も整然と並んでいます。このような墓地はフィレンツェ、ローマ、アンツィオのほか、ヨーロッパ中の主な戦場に点在していて、それが政治的な配慮であれ、合衆国政府の戦没兵士に対する並々ならぬ思い入れに圧倒される思いでした。

この墓地を見下ろす高台に建てられた兵士の像に、私たちは二つの花束を捧げました。一つは大戦中戦死した、敵、味方すべての無名兵士のために。一つはマスダカズオのために。私たちが日本人が、繁栄の極みのなかで、さらにそれを不足と想っていること。生命あることを幸いに、限りある自然の蓄えを侵してまで更なる利便を求めることを、土中のあなた方はどうお思いでしょうか。

延々と続く十字架の列を見渡しながら、旅愁も手伝って、私はさまざまなことを考えました。

たとえようもないほど美しいフィレンツェの夕陽が、カズオの死に場所アルノ川を絶えることなく照らすことが、私は唯一救いのように思えました。

一九九一年の春、ロサンゼルスでマスダカズオのお兄様、増田正雄氏にお約束したカズオの足跡を追う私の旅は、ここでひとまず終止符をうちました。

「アンツィオ上陸記念博物館」維持会員として、恥ずかしい額の寄付をさせて戴いたことに、皆さまからの思いがけない感謝の気持ちをお伝えくださり、恐縮しています。

貴方が私からの寄付を快く受け取って下さったことで、今回の私のイタリア旅行は何よりも増して有意義なものになりました。

イタリア国民がどんなに経済的に困窮しても、百年、千年の尺度で遺蹟だけは守りぬく国民であることを、私は同行の藤川君から教えられました。

私の肉体や財産は死とともに消滅してしまいましたが、私の魂のひとかけらが日本を遠く離

れたアンツィオの博物館に、偉大なイタリアの歴史とともに引き継がれることは何という喜びでしょう。マスダカズオの死が決して無意味なものではなく、その死後もアメリカにのみがえって、大きな福音を人々にもたらしたことを思い起こします。

重ねて貴方がたの友情とご親切に感謝いたします。貴方から戴いた博物館の会員メダルは、子供たちにその意味を伝えるとともに、我が家で大切に保存することをお約束いたします。

一万キロ離れた広島から、アンツィオ上陸記念博物館のご成功と、パトリツィオ館長はじめ有志会員の皆様のご健康をいつもお祈りしております。

敬具

一九九七年五月二十一日

里吉賢司

署名

「日本国広島県広島市
里吉賢司様

前略

私は Amerigo Salvini (アメリカゴ サルビーニ) といまして、アンツィオ上陸記念博物館戦闘研究記録センターの書記で、ボランティアでプレスオフィスの責任者を務めています。

この手紙はイタリア語で書いており、貴方に翻訳者探しというご迷惑をおかけすることを、まずお詫び申し上げます。英語を話したり聞いたりするのはある程度出来るのですが、書くのはそれほど上手くありません。

貴方が私どもの館長 Patrizio Colantuono (パトリツィオ コラントゥオーノ) に宛てたお手紙を拝見いたしました。

貴方が私達の博物館をとて評価され、素晴らしい贈り物を下さったことに対し、私達すべての同僚の名において感謝いたします。博物館、特に私はアンツィオ上陸・戦闘の生存者の証言を収集しています。もし故マスダカズオ軍曹の写真や資料を受け取り、私たちの博物館に特別なスペースを設け、展示することが出来れば非常に嬉しく思います。(中略)

広島に関しては、私は雅号が Mizu (サトウテツオ) という日本人の芸術家と二十年来の交友関係があります。彼はリエコという芸術家と結婚し、ローナという女の子がおります。Mizu (ミズ) の両親は(お母さんはミズシマといいますが) 広島で被爆し、しばらくは生きておられましたが、それがもとで亡くなりました。この私の友人は、現在、絵画展を開くためフランスにおります。彼も私と同様、戦争の真つただ中の一九四四年に生まれました。

広島について、そして彼の両親について話るとき、彼は興奮し、同時に怒りはじめます。Mizu と私は言語、風習、生活習慣の相違を超えてすぐに理解し合い、兄弟のようになりました。彼が三年間住んだアンツィオを訪れるときは、私の家族と彼の家族は常に一緒にいます。

このことは、それぞれの民族が努力さえすれば、平和にそして友好的に生きていけるとい
う証（あかし）です。この友人は、今は東京の近くの、どこか我々の町アンツィオに似た海
辺の小さな町に住んでいます。

里吉さん、貴方が上陸記念博物館を訪れた日にお会いすることが出来なくて、本当に残念
でした。私はよくあそこへ行くのですが、アンツィオ旅行観光会社での仕事が忙しく、あま
り自由な時間がとれないのです。

私たちの企画に対する貴方の提案について、パトリツィオ館長および私たちすべての同僚
の名において感謝いたします。ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願い
いたします。

sayonara

一九九七年七月二日

Amerigo Salvini

署名 「

じじく

「合衆国陸軍軍曹 マスダカズオ 第三部、ミラノの魂柱」を執筆するうち
に師走が目前となりました。続きは次号で。

本文「合衆国陸軍軍曹 マスダカズオ（一） イタリアへ」の抄文が英語、イ
タリア語に翻訳され、肖像写真とともにアンツィオ上陸記念博物館内に展示される
ことになりました。永遠の都・ローマを旅される機会がありましたら、参観してみ
てください。きっと歓迎して戴けることと思います。

本稿の執筆にあたり、国内外の多くの方々から貴重な資料や文献をお寄せいただ
きました。厚くお礼申し上げます。
参照資料、文献は最終回巻末にて。

おじさんの青春日記 くその2く

恩師

佐藤はじめ先生

《コピーライターへの道開く！

Y M C A コピーライター塾第一期生募集！ 四月開講！

宣伝広告理論からラジオ・テレビCM 台本、写真技術、コピー制作など

あらゆる広告制作技術を六ヶ月で。各界で活躍中の豪華教授陣。就職、

転職、自宅就業に有利。授業週二回午後六時三十分から午後九時まで。

受講料 円（分割可）。お問い合わせは八丁堀・広島Y M C A 担当者まで《

一九八六年（昭和六十一年）の春、新聞広告で見つけた小さな広告がきっかけで、私は夜間の「Y M C A コピーライター塾」に入塾しました。

宣伝マンにあこがれる大学生、転職を模索する会社員、主婦、OL。職業も年令も雑多な二十人ほどの生徒が同級生です。最年長の私は、いつの間にか「級長」に選ばれました。

コピーライターの仕事は、企業の製品やサービス、情報をもっとも効果的な手法で顧客に伝える、文章を創作することが主な仕事です。わずか数文字、数行の言葉で端的に訴求を表現するキャッチコピー。それに続く、やや長文のボディコピー。

雑誌や新聞の広告だけにとどまらず、コピーライターの仕事はテレビ、ラジオ広告の制作や、大がかりな宣伝広告の戦略立案、新製品開発にまで及びます。

当時の私は、父が遺してくれた小さな工場を、父が手がけた仕事とは全く異なった分野へ転換するという仕事に没頭していました。専門書を繰りながら設計した、スポーツカー専用の特殊なエンジン部品の製造がようやく軌道に乗り始めており、それらの製品の販売のためのカタログや、パンフレットの制作に迫られていました。

しかし、その製品といえば、『真空溶解したアルミニウム・バナジウム添加のチタン合金を熱間鍛造した』『三次元骨格構造をもつポリウレタンフォーム濾過材料』と

いった難解な技術用語の羅列。とても手を加えないまま、セールス図書のなかに使うことはできません。

私の工場で造る特殊な工業製品の特長を、誰にでも理解してもらえ、受注につながる平易な商業文に変換してくれるコピーライターが、どうしても必要だったのです。しかし、それだけでなく宣伝広告の分野で、市場規模や質で中央に大きく立ち遅れている広島で、専門的な工業知識をあわせ持つコピーライターを見つけることは至難のわざです。東京の専門ライターに依頼すれば、目玉が飛び出るような報酬を要求されます。社員数名の会社に、とてもそのような余裕はありませんでした。

私が物を造り続ける限り、この課題は終生ついてまわることになります。

「よし、それなら自分がやっつたる！」

恐いものなしの三十七歳の春です。

当時、一世を風靡していた糸井重里のような高収入、コピーライターとして大成し、いつか東京へ出て、ひよつとしたら映画女優との恋も。

不純な幻想が入塾動機の裏にあったのかもしれない。

*

「広告とは」「マスメディアとは」「市場調査の理論」「マーケティング」「グラフィックデザイン」

最初からコピーの制作を指導してもらえるものとはかり思っていた私たちは、開講後一ヶ月余り続いた座学に少々うんざりしていました。

しかし私は、大学紛争に明け暮れた大学時代から十五年を経たのち、黒板やチョーク、生徒の私語がざわめく世界にタイムスリップしたような思いに浸っていました。

昼間の煩雑な仕事を束の間忘れて、まったく新しい分野の学問にふれる歓びを感じ始めていました。

初めて教室に入った日、机の手ざわりを手のひらで確かめました。

大手広告代理店の広島支社に勤務されていた佐藤はじめ先生は、バリバリの制作マンでした。四十代という年令はその世界では油の乗り切った世代で、夜とない昼とない広告制作の仕事の間を縫って、佐藤先生は遅刻することもなく、大きな体を悠然と教室に現しました。

佐藤先生は、広告の大きな賞を何度も受賞されたという噂でした。

いつものように、両手をズボンのポケットに入れて教室に入った先生は、黒板の前に立つと、皆を見渡して「エヘン」と咳をひと声。

次に、愛敬のある丸い小さな目を皆の前に突き出して、意地悪く、

「宿題、できたかな？」

教室がガラリとなごやかな雰囲気になります。

語尾ははつきりと、言葉の歯切れが良くて、いい、悪い、をはつきりと口に出す佐藤先生の講義は、ユーモアのなかに決然とした先生の美学を感じました。

「うーん、この言葉がとっても新鮮だねえ。うん、いい、いい」

「前に言ったでしょ。借り物の言葉ではダメなんだ。あなただけしか語れないメッセージを、汗を出して綴（つづ）らなきゃダメなんです」

「とにかく現場なんです。取材なんです。その商品はどんなものなのか、どんな人たちがどんな思いで作っているのか、とにかく足を使って調べることに。それからです」

佐藤先生は、生徒が制作した課題を丹念に黒板に書き移したのち、講評と添削に入ります。

講義が始まって三十分も経つと、先生の独壇場です。

黒板の前を縦横無尽、時には黒板から三メートルも四メートルも離れて、袖まくりしたワイシャツからのぞく太い腕を前に組み、黒板をにらんで、

「ウーンツ。でもねえ。そうなのかなぁ。ウーン」

と、つぶやきながら唸り声をあげます。

「机に座って、空想でコピーを書こうなどという横着な仕事を、私はゼツタイに許しませんっ！ クライアント（依頼主）の会社で製品を一所懸命造っておられる人に申し訳ない、とつても失礼な行為でありますっ」

コピーばかりではありません。

そのコピーにふさわしい活字の書体は、色彩は、グラフィックデザインとの整合性は、果ては印刷される紙の種類にまで、熱っぽい佐藤先生の声が続きます。

佐藤先生は大組織のなかで働く一人のサラリーマンでもありませんでしたが、周りを窺（うかが）がって出世してやるうなどという野心を、まったく持ち合わせていない人のようでした。会社の流れにそって器用に気遣いするよりも、広告の現場で口泡飛ばし、死にもの狂いで制作に取り組むことを、生きがいにならされているように感じました。

塾生の私たちには、

「コピーライターだけで終わっちゃダメだよ。各所に目くばりの出来るディレクターになりなさい。そうして、出来たら、経営のことも解るプロデューサーを目指しなさい」

と、いつも教壇から語りかけておられました。佐藤先生ご自身は、ご自分の思いを曲げて異種の人たちとつきあったり、業績の評定に明け暮れる仕事は避けておられるように私には見えませんでした。

勤務先の会社の応接室でお会いする先生より、私には黒板の前の先生の方がずっと輝いて見えました。

宣伝広告という作業が決して浮わったものではなく、様々な分野の人の、実に真剣な議論と情熱のうえに成立していて、最終的にはたずさわる人の生き方、哲学によって成果が左右されるものだということ、私はこの頃になって痛感しました。カリキュラム初期の座学の意味がやっと理解できたのです。

造り出す製品の技術が優れてさえいけば世の評価につながり、顧客に受け入れてもらえるという工業の時代はとうに過ぎて、一人よがりや自惚れに陥りやすい、物造りの世界にいる私に、広告制作はとても刺激的な世界でした。

広告制作と機械工業。分野こそ違え、私の仕事の周辺と広告制作の現場は驚くほど共通しており、もの造りの最前線にも「市場、大衆」といったものへの見識や、広告制作の技術を導入する必要性を強く感じていました。

佐藤はじめ先生の口癖は、「だからどうした?!」でした。

「そのコピーのあとに、『だからどうした?!』という言葉をつけて考えてごらん。

」

「だからどうした?!」。たとえば、今をときめく糸井重里のコピ

ー「不思議、大好き。」です。

「不思議、大好き。」

「だからどうした?!」。

「だからどうした?!」と一度居直ってみて、その言葉を反芻（はんすう）した時に、なにか心にぐつと残るものがありますか？

そうなんだよね、今の時代、『不思議』なんて言葉、忘れていたよねっ、というような共感がありますか？

その言葉にふれることでパアツと世界が広がるというか、余韻というか、そんな問題提起というか、空間的なものごとっても大切なんです。ぼんやり生きていちゃ、ダメなんですっ!

私にとつてまるで難解な、高度な俳句の世界のようでした。

ビニール袋いっぱい缶ビールを教室に提げてこられて、

「きょうは授業は無しっ!（声をひそめて）飲み会にしましょう」

と言つて、塾生に拍手と歓声で迎えられることもありました。

佐藤先生の授業は、いつもこんな調子でした。

時によると夜中の十二時近くまで、コピー塾の明かりだけが明々としたままの時が、幾夜もありました。

塾生の誰もが、佐藤先生に叱られることを望んでいました。

*

YMCAコピーライター塾に通い出してまもなく、私は一冊の本を思い出していました。

『江分利満氏の優雅な生活』で直木賞を受賞した山口瞳さんの著書のなかに、著者の青春時代の自伝ともいえる『小説 吉野秀雄先生』という本があります。

昭和二十一年の春、敗戦後間もない鎌倉に「鎌倉アカデミア」という大学校が創設されました。

鉄火場に入入りし、ヤクザとつきあい、喧嘩に明け暮れていた当時十九歳の山口瞳は、この大学の文学部に入学します。大学といっても文部省の認可もない私塾のような学校のことでですから、資金も充分ではなく、鎌倉・光明寺の本堂や庫裏（くり）を仕切ったの授業が進められました。

国文学の片岡良一、仏文学の中村光夫、英文学の高見順、吉田健一という、今思えば現代日本を代表する錚々たる教授陣にまじって、教授、吉野秀雄先生は「万葉集と短歌」を講じていました。

明治三十五年、群馬県高崎の織物問屋に生まれた吉野秀雄は、病弱な少年時代を送ったのち、かろうじて慶応義塾大学経済学部に進みます。しかし、卒業を目前に結核という業病をえて、中途退学を余儀なくされます。生涯を病のなかに過ごした吉野秀雄でしたが、因習的、閉鎖的な戦前、戦中、戦後の歌壇にあつて、独学で極めた彼独自のきらめくような短歌の世界を創出しました。

「鎌倉アカデミア」で初めて吉野秀雄先生に接した山口瞳は、そのときの様子をこのように書いています。

「先生は、教室に入ってきて、何も言わずに、いきなり、黒板に、吉野秀雄と書いた。大きな字だった。白墨を叩きつけるような、勢いのいい書き方だった。

『これが私の名前です』
しばらくの間、自分の字を見ていて、こちらにむきなおつて、そう言った。自分の字の一字一画をたしかめているような感じだった。

私たちは、あつけにとられた。先生の声は、まさに庫裏の障子の震えるような大音声であった。大きな声であるばかりでなく、不思議な熱っぽさと力強さにあふれていた。ふりしほるような声だった。（中略）

そういう感じが、ただちに、私を撲（う）った。腹の底に何かが響いたようだ。おそろしかった。

教室に、失笑と私語がおこった。みんな、びつくりしていた。一言で、たちまち教室が緊張した。失笑はすぐに止み、静かになった。

先生は、今度は、黒板には会津八一、松岡静雄と書いた。

『これが、私の先生の名前です』
そう言つて、また黙つてしまった。突つたまままで、白墨の字をいとおしむように見ておられた。

誰かが、高い声で笑つた。つられるように何人かが笑つた。私は、どうなることかと思つた。次に何が起るか。おそろく、叱声が飛ぶか、笑つた生徒にむかつて先生が突進してゆくか、教場を蹴るように出てゆかれるかするのだろうと思つた。

しかし、先生は、こちらを向いて、ニヤツと笑つた。なんともいえぬ、やさしい顔だった。（中略）

教室がなごやかになった。そうして、すぐに万葉集の講義にはいった。」

何ら飾らない、万葉の童（わらべ）のような吉野秀雄に、山口瞳は急速に傾倒していきま

す。吉野秀雄の家族とも、親戚のような誼（よしみ）を結びます。

十九歳の山口瞳にむかつて、
「山口君！恋をしない。恋愛をしない。恋愛をしなければ駄目ですよ。

と酔つて、けしかける吉野秀雄、四十四歳。」

酒を飲むとすぐに酔ってしまい、軟体動物のように酔ってしまっただけから、とめどなく飲む。酔って電信柱に抱きついたままの吉野秀雄を、山口青年は必死にひき剥がし、背負って家まで送り届けます。

「若くとも、貧しくとも、恋ぐらいすべし」。

吉野秀雄の口ぐせでした。

その年令の山口瞳にとつて、恋をするということは結婚と同義であり、学生の彼にそれは不可能なことでした。

マグワイとかワイカンという過激な言葉で山口青年をアジった吉野秀雄でしたが、他の言葉、たとえば、性交とかスケベエとかいう汚い言葉を口にすることは一切ありませんでした。卑しい考え、卑しい生き方を何より嫌悪する吉野秀雄でした。

まぐわいははかなきものといはれども

七日経ぬればわれこひにけり

吉野秀雄

性は生の讃歌であり、吉野秀雄をとりまく相次ぐ不幸と、死の影が吉野秀雄をして、なおさらに赤裸々な生命への希求に駆り立てたのかもしれない。

吉野秀雄の純潔な歌を読めば、そのことが瞭然と理解できます。

山口瞳と吉野秀雄との交流は途切れながらも、昭和四十二年七月に吉野秀雄が他界するまで続きました。山口瞳は晩年まで、吉野秀雄を生涯の恩師と仰ぎ続けました。

その日の食にもこと欠く敗戦直後の世のなかで、文芸を唯一のなりわいとする吉野秀雄の生活は赤貧、病苦の連続でした。加えて、後妻と先妻の娘との激しい相克、長男の結核、それにつづく発狂。

このような境遇のなかで、吉野秀雄は葉先に光る露のように清冽な歌を次々と発表しました。

僭越の極みながら、作品のなかから十七選。

前妻の病死の前後に。

病む妻の足頸にぎり昼寝する末の子をみれば死なしめがたし

額冷やすタオルの端に汝がなみだふきやりてはわが涙拭く

潔きものに仕ふるごとく秋風の吹きそめし汝が床のべにをり

院内に居処もなく物干場のかげに煙草を吸ひつつし哭く

今生のつひのわかれを告げあひぬうつろに迫る時のしづもり

をさな児の兄は弟をばげまして臨終の母の脛さすりつつ

母死にて四日泣きぬしをさながら今朝登校す一人また一人

前妻との娘を詠んで。

長の娘を母によく似つと人のいふにつくづく見つめ汝ぞ恋しき

旅の夜を上の娘と蚊帳かやに寝てあはれ亡き妻のこよひ恋しき

貧しい日常に。

身を賣めて詠みし十首の歌売れど味噌一貫目得むによしなく

一皿の乾パンに水の昼飯は机のうへにすぐに済みたり

明日子らに持たす弁当の糧かて絶えしこのさ夜更けのあおばづくのこゑ

いまの世に正しき者は貧しなどいひける頃は余裕ありにき

昭和二十二年十月。詩人、八木重吉の未亡人、とみ子を熱愛し、再婚。自宅でささやかな結婚式をあげる。吉野秀雄が束の間味わうことができた、幸せのときであった。

結婚式での誓詞にかえた歌のほか。

これの世に二人の妻と婚あひつれどふたりは我に一人なるのみ

恥多きあるがままなるわれの身に添はむとぞいふいとしまざれや

うつし世に大き悲しみを三たびまで凌ぎし人は常にやさしき

末の子が母よ母よと呼ぶきけばその亡き母の魂たまも浮ばむ

私が二十代の頃、吉野秀雄の歌を詠じるうちに、自然と憶えてしまった歌があります。

昭和五十三年（一九七八年）、結婚の翌年、長男が生まれました。父の工場の再興に試行錯誤を繰り返していた私は、逆転をかけた新製品の発売も在庫の山、というありさまを何度か続けていました。

年には不相応な借金を負って、預金はゼロ、昼食もままならない一時期を経験してしました。

その頃出会った吉野秀雄の秀歌。

学校よりもどりきし子が何もせず

おしだまれるは夕餉ゆづけ待つなりなり

いうまでもなく、極貧の吉野家の子供たちが学校から帰宅しても、食べさせるものとしてなく、家の窮状を知りぬいている子供たちは「ひもじい」とも言わず、ただ、押し黙っている、というものです。

生後間もない長男を毎朝、保育園に預け、私は工場へ、妻は結婚前からの職場へと向かう日々を送っていた私に、吉野秀雄のこの歌は、何かを私に突き付けてくるものがあるように感じたものです。

二十八文字のこのコピーは、いつしか、私への勇氣に変わりました。

しばらく経つてのち、小学校に通う子供たちが、私のような者を親と慕って、毎日、元氣よく声をかけて学校から帰ってきてくれることを、ありがたいとも、不思議なこととも感じるようになりました。

肉のつながりのない父親にとって、子供とは神か仏からの預かり物のようなものなのかもしれない。

この思いをコピーにまとめて、宿題の作品として佐藤はじめ先生に提出したことがありません。

先生は、いつものように私の顔を覗きこむように首をかしげて、

「そうなんです、これなんです。この思いを大切にしてください」と、激賞してくださいました。

この時、人の父親でもある先生の頭のなかには、先生のご子息の姿がよぎったに違いありません。

*

私の恩師、佐藤はじめ先生は、コピー塾の講師を終えられたのち、しばらくして東京に転勤されました。授業料の滞納が多かった「YMCAコピーライター塾」は、私たち一期のみで打ち切りとなったという噂を聞きました。

コピーライターとして大成し、女優と恋におちいる夢はついに果たせませんでした。数え切れないほどの出会いのなかで、広告制作の世界の、茫々とした広さをのぞき見る事ができました。

「いつか一緒に仕事がしたいのう」

というコピー塾時代の二人の会話どおり、私と遅刻の回数を競いあっていた山本正義君は、今では私の会社の取締役として経営にあたってくれています。

平成六年暮れ。佐藤先生から戴く毎年の年賀状を楽しみにしていた私に、年賀欠礼の便りが届きました。

一人きりのお子さん、先生のご長男を自動車事故で亡くされたというものでした。思わず葉書の字面を追うことをやめたいようなお便りでした。

ただただお慰めするしかない。

書く文字の空しさに嫌気を感じながら認めたお悔やみの手紙へ、佐藤先生からの返書が届いたのは、年も明けて二月のことでした。

これほど哀しい、まさにご自分の血を絞って綴られたような長文の文章が、先生独特の大きな字の宛名が書かれた封筒に入っていました。

「失って困るもの」が無くなったことも加わり、ようやく「腹が据わった」気がします。『まっとうに生きることへの強さ』、『ダメな奴への優しさ』そんなあたりへの腹であります。一方である種の凄味さえ自分で感じるようにもなりました。

という添え書き。吟味された用紙いっぱい、佐藤先生、生涯一度の文章が整然と印刷されていました。

*

十一月十六日通夜、十七日告別式。

君を知る私の友人にも知らせず、会社の人達にも遠慮願ったにもかかわらず、私たちの想像をはるかにはるかに越えたたくさんの人達が君を送ってくれました。それ以降も連日多くの方々が遺影と遺骨の前で泣いてくださりました。私たちの友人、先輩からもたくさん心のこもったお手紙やお電話を頂戴しました。

理解されにくい性格ゆえに友達が少ないと思っただけに、こんなにも多くの方が君に何かを感じていてくださっていたのかと思うと、嬉しかった。最後に君がくれた大きな親孝行、確かに受け取った。

事故車にあつた遺品を母さんと裏庭で焼いた。取り出してくれた0君の配慮で血が付いたものは無かつたとはいえ、ひしゃげた筆箱、無残にくださったCD、普段の君からは想像もつかないきれいに取られていた大学の講義ノート

それらは、君の全身に降りそそいだであろう車のガラスの破片にまみれていた。私はその破片で左手の人差し指を切った。血が流れた。その時、私たちには孫が持てないことに、初めて気がついた。それを告げると母さんは気分が悪くなり中座した。

君の無念さなのか遺品は燃えにくく夜になった。赤い炎が暖かくきれいだった。二人だけの野辺送りの後、母さんはあの日以来、初めて泥のように眠った。

これからというのに、と多くの方が慰めてくださりましたが、私たちは、よくぞ二十歳まで生きて、頑張った、よくやった、と君を褒めてあげたい。

安易な妥協を嫌い、ものごとの本質にこだわり、奔放にみえてどこか禁欲的であり、過敏なほどに人に気遣い、その限界に達すると爆発し多くの人に迷惑をおかけした。

その都度、私たちは君を責めた、幼児性をなじった、社会のなかに生きることの掟を説いた。しかし今回多くの人達から、私たちの知らなかつた君のもう一つの姿を知らされた。

「いつそ不良になれば楽に生きられる」とよく言っていたそうだね。フェデリコ・フェリーニ監督の映画が好きだった、最近感動した本は有島武郎の「小さき君へ」「生まれいづる悩み」だった、「この頃、やっぱり親父に似ていると思う」。車の中の遺品のノートにも「人生の岐路をエンジン全開でかつ安全に走り抜けるために」というフレーズがあつた。

「かつ安全に」。ようやく世間と折り合う術を身につけ始めていたことを知らされた。幾度の挫折にもめげずいつも前に前に進もうとしてきた君の生き方、褒めてあげたい。

母さんは、母親がゆえの本能なのか君の寿命が長く無いことをどこかで感じていたと言ふ。身近な人からさえ「甘やかし過ぎ」と言われても、すべてを君に捧げて生きてきた。

私はこの十年近く怒ってばかりいた気がする。自ら蹴落としはしなかつたが、谷から這い上がってくるのが成長と思ひ込んでいた節がある。半ば意識していたとはいえ、あまりにも常識的に対処し、父親として未熟だった悔いが日増しに強くなる。

生き急ぐかのように、君が執拗に追い求めていたものは何だったのか、という私の問いに母さんは「幸せ」と答えた。そう、それは大それたものではなく、ささやかなものであり、「安らぎ」だったに違いない。君が好きだった向田邦子さん、倉本聡さんの描く世界、そこでは人が人に優しく、誰もが人としてまっとうに生きることにかんばり、ごくごく当たり前のことなのに今の世では郷愁となってしまうた生き方。それを探していたのだということが今はよく理解できる。

あの日から我が家から「音」が消えてしまったことに、君がいなくなってしまうたことを実感している。もうすっかり冬になった。弱々しいけれどやさしい日ざしに懐かしさとありがたさを感じている。

日だまりの中でボンヤリ二人して君のことを思い出しているときが妙に心地良い。私たちは一遍に年老いた気がする。

しかし、私たちは、君から託されたことを忘れてはいない。助手席にいて君に連れ添うように逝った小学校時代からの唯一の親友岡田君、そして彼のご両親、妹さんへのあがないである。何をもってもあがなえない。永遠に見つからないであろうあがないのために、私たちは、懸命に強く生きたいと思う。

君が命名した愛犬「真吾」は、あの日から三日ほど一切食べ物を受けつけず塞ぎ込んでいたが、今は元気になった。心なしか「甘え犬」になった。君の替わりをしているつもりなのだろう。

最後に、君の新居は「横浜霊園」に決めた。以前、我が家から山づたいに、真吾も連れ三人で散歩にいったあの霊園だ。心ゆくまで眠れ。起きなければもう疲れ果てることもない。いつの日にか私たちも逝く。その日まで、ゆっくり眠り給え。

*

佐藤はじめ先生と奥様は、ちょうど横浜と接するあたり、神奈川県鎌倉市に二人きりで住まいです。

先生のご自宅から真南へわずか三キロのところに、歌人、吉野秀雄が戦後荒廃の世のまっただなかで、青年達に熱く万葉集を講じつづけた、鎌倉・光明寺があります。

死の直前、病床の吉野秀雄は生涯の大半を過ごした鎌倉に、この短歌を残しました。

彼の世より呼び立つるにやこの世にて

引き留むるにや熊蝉の声

吉野秀雄

この作品を、現代を懸命に駆けぬけた二人の青年、
鈴木大介君、岡田功一君のみ魂に――

参考文献

- 「あの広告はすごかった!」 中経出版
- 「小説・吉野秀雄先生」 文芸春秋
- 「やわらかな心」 講談社
- 「定本 吉野秀雄全歌集 第一巻 第二巻 第三巻」 弥生書房